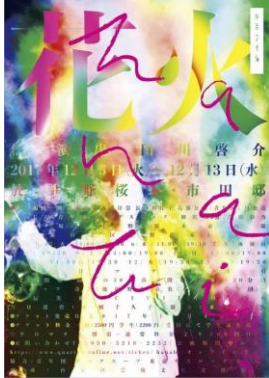


演劇公演「花火」

主催 田川 啓介（水素74%主宰）
日程 平成29年12月5日（火）～12月13日（水）全13公演
会場 市田邸（台東区上野桜木1-6-2）



「水素74%」は、本公演の主催者である田川啓介が2010年に発足。主宰である田川啓介の作品を上演するプロデュースユニットで、他人を顧みず、自己の利益だけを考慮して自己保身に走ったり、他人に罪をなすりつけたりしようとする人々の醜態を笑いと悪意を交えて描いた作品を発表しています。

今回の公演では、リアリティーを追及する演劇を目指しました。セットでそれらしい場所を捏造するのではなく、本物の場所に観客を連れて行き作品を見せるという試みにチャレンジした意欲作です。

今回公演する「花火」は、とある寒村にある100年以上続く老舗旅館を舞台に村興しのための花火大会の開催に向けて右往左往する人々を描いた群像劇です。花火大会を一週間後に控えている花火大会実行委員による緊急会議の様子を中心に展開されていきます。



(←)会場は、国の登録有形文化に指定されている「市田邸」。寺町から屋敷町に遷り変わった上野桜木の地に明治40年、日本橋の布問屋を営む初代市田善兵衛がその居を構え築100年を越えた今も、芸術文化活動の拠点として町に親しまれています。劇場にそれらしい舞台芸術をつくるのではなく、この市田邸のお座敷をそのまま使い、老舗旅館の一室とすることにより、臨場感を伝え、また客席をお座敷の隣室の六畳間につくることで、正に今そこで紛糾する会議が起こっているかのような生々しさを味わうことができます。定員25名という小規模な公演ですが、目と鼻の先で繰り広げられる役者の演技は、通常の劇場では体験することができない特別な空間となりました。

《演劇「花火」のあらすじ》

とある寒村。村興しのための花火大会を一週間後に控えていた。そんな折、対岸で大火事があり、不謹慎なのではないかという理由で大会の開催が危ぶまれるようになってしまう。そのため、村民が主体の実行委員による緊急会議が開かれ、議論がなされるのだが、実行委員の面々はそれぞれに花火大会で得られる利益があり、それを守るために会議に参加していた。花火大会に反対する火事の被害者や、村役場の村長も会議に加わると、委員たちは立場が危うくならないように保身に走り、それでもなんとか自分の利益を守ろうとするために会議は迷走し、紛糾していく。

大掛かりな舞台セットや作り込み・舞台転換等はなく、8畳一間の座敷や引き戸・縁側等をそのまま使用するというシンプルな構成ですが、築100年を越える古民家の存在自体が物語の真実味を与えるとともに、まるで会議の場に居合わせたかのような臨場感を感じさせました。また、実際の季節は真冬の公演ですが、物語の設定である夏を感じさせる衣装・小道具(蚊取り線香・虫刺され薬・うちわ)・効果音(蟬の鳴き声)等を上手く活用することで、違和感なく世界観を表現していました。

物語は、一見するとごく普通のどこにでもいそうな登場人物たちが、表向きは花火大会の開催に向けてそれらしい事を言っているが、それぞれに抱えている思惑が滲み出ており、保身・利権争い・色恋・金儲けなど、各々の欲望を巡って徐々に紛糾していきます。

登場人物は、西川(花火大会実行委員:同じ実行委員である由美と不倫関係)、由美(花火大会実行委員:西川と会うアリバイ作りのため参加)、天野(花火大会実行委員長:妹の幸子を花火プロデューサーとして参加させたい)、大川(花火大会実行委員:火事被害者の後輩)、栗田(老舗旅館の跡取り息子:花火大会開催で利益を得ている)、紀子(西川の妻:夫の浮気に勘付いている)、幸子(花火プロデューサー:自身の必要性を感じず辞めたがっている)、細井(大川の先輩:火事被害者)、村田(村長:自身で開催・中止の決定をしたくない)といった立場や思いの異なる9名です。

(※以下の6枚は、ゲネプロ時の写真。)



8日間、全13回の公演は、盛況のうちに終了しました。

今後も、今回の公演で得た経験を活かし、劇場での公演に加え、市田邸のような古民家等の歴史や雰囲気を持つ場所を舞台美術として使う創作を継続していく予定です。

